

あかぎれに焼香の香のやわらかし

焼香と焼香の手の香の冴ゆる

インジンの香りの息の白さかな

番頭に牛乳瓶と蜜柑の香

びっしりの手帳の香来る寒さかな

一戸ずつおでんの香り谷の村

寒晴の生ける市場の香りかな

発掘の手に大根のおでんの香

炒飯ちやうの炒の部分の香を時雨

鍋のラーメンの香の余韻かも

足音を寒くしていく持久走

ガムランの高音の初時雨かな

冬の川サ行の波の音ばかり

冬眠の心音神に聴診器

留守電にあんこ鍋の煮える音

調音の一音の度空つ風

万葉の時代の音の雪はやし

愛猫の音かじけ猫へと変わる

十露盤の音反響す冬の窓

春めきて工事鉄の音ねばかりなり

お守りは極彩色で冬深し

色を持ちすぎて冬茜の濁る

冬晴の地味色すぎる滑り台

錆色のトラックの首冬銀河

気高さの色を映して鶴凍る

羊水の色荒行の冬の滝

土偶には土色の夢そぞろ寒

冬の水棺の窓の色をして

純粹な色の雪のみ残りける

古着屋は虹色のみや春隣